

保守主義の境界

升 信夫

一 はじめに

何かの折り、もはや回想の対象から抜け落ちた、かなり以前に自分が著した文章を再び目にするということがある。或いは、古いビデオテープの中身を調べていて、語りかける古い自分を発見するという経験でもよい。大抵は、古いアルバムの写真を見るのに似て、まず懐旧の感情がわき上がる。だが、少しその文章を読み進めたり、またそのビデオを見続けると、回想から脱落した過去の自分の姿と、今の自分とのずれが気になりはじめる。その中には、日和見主義、トロツキストなど、今となつては殆ど耳にしない言葉が踊っているかもしれないし、肩までの長髪を掻き分けながら非同盟の理想について真摯に議論する姿があるかもしれない。或いは、今は微かにしか思い出すことができないう当時の流行の言葉、抑揚を用いている場合もあるだろう。その時、ふとその違和感は、次のような疑問に結びつく。これは本当に自分なのか。鏡に自分の姿を認め、一つの身体、一つの生命を持つということを確認し、与えられた自

分の名前を覚え、呼びかけに数限りなく応答し、持ち物や用紙に幾度となく自分の名前を書き込み、様々な社会的役割を与えられ、行動するうちに、自分についての経験の層が幾重にも重なる。そうした経験を通じて、「わたし」という存在の真正さは確かなものとなり、確かに実在するもの、疑い得ないものと感じられるようになる。だが、過去の自分との偶然の遭遇、そしてそこから生じる違和感は、そうした疑い得ない確固不変の自己を相対化し、一つのものと思えた自分が、実は、様々な意識、無意識が偶然に集合した末に過ぎないと断定するよう促す。人は、外見、容姿は年齢とともに変化し、また意見、感じ方も状況によってかわるとしても、一つの生を全うする「わたし」という核が存在すると考えているが、この違和感は、「わたし」という核の実体性を相対化するのである。¹⁾

だが、そうした知見に依拠して、一つの「わたし」など存在しないという意識を日常生活にまで徹底することはどれほど可能なだろう。誰しも「わたし」についての安定した像なしには、心やすい日々を全うすることは難しく、たとえ虚像であっても、そうした「わたし」を抱くことは人間的条件の一つであるようにも思われるからである。換言すれば、「わたし」とは、今、そしてこれから生きるために否応なく自らに与える恣意的なストーリーに思える。本稿では、保守主義、自由主義などのイデオロギーも、集合的な主体が自らに与える、そうした恣意的なストーリーの一つであり、首尾一貫した価値、信念の体系として描き出されるとしても、そのようなものとして実体性を持つて実在しているわけではない、ということを軸に論を進めるが、先ず、幾つかのことを確認しておこう。

同一の外見を持つものを常に同一のものとして語り得るとは限らないということ、そして一つの実体であると思えるものの真相が、複合的なもの、あるいは関係的なものであり、かつ不可避的に変化するものであるということ、これらは、根底的には人間の言語活動の特性に由来する。例えば、男女の区別をどのように身につけてきたかを考えてみるとよい。身体的特徴に対する名付けとして男女の差異が生まれたと仮定して、その差異を日常で使用できるまで

に修得する一般的な方法は、スカートをはく・はかない、髪が短い・長いなど外見的特徴といった別の差異に、その男女の差異を対応させることである。その対応は、一方の差異を主語、他方を述語とすることで果たされる。そして男女の差異は、使用されるうちに、家事をする・しない等々の社会的役割についての差異にまで関係づけられるようになり、そうした差異の関係性が一体化して現在ジェンダーとも呼ばれる一つの複合的な観念になる。観念の中には一つのストーリーが凝縮されているが、その際、身体的特徴についての差異を他のどのような差異と一致するものとして関係づけてストーリー化するかは、あくまで恣意的なものであり、またその差異の実際的な境界線は一致する必然性はない。男性の身体的特徴を持つものとして差異化されるものが、髪が長く、スカートをはいっているという場合もありえる。それにも拘わらず、その境界線が一致すると措定することは強い規範性を持つことになる。男性的特徴、髪が短く、スカートをはかず、家事をしないという、本来はそれぞれ別の差異が恣意的に結び合わさり一体化すると、男性的特徴を持ちながら、髪が長かったりスカートをはいたり、家事をしたりすることは、男という観念にあわず異常なことと感受されるのである。但し、それぞれの差異の関係付けは、恣意的であるがゆえに、状況の変化によって融解し、或いは別の差異が付加される。男性的特徴を持つ者達の間で、髪を長くすることが一般的となると、髪の長さの差異は男女の差異に徐々に関係づけられなくなり、また男性が山高帽をかぶるという習慣が一般的となれば、山高帽をかぶる・かぶらないという差異が付け加えられる。つまり差異の関係付け、つまり観念の内容は、変化する。こうして様々な差異の結合である観念は、恣意性、規範性、変化性という特徴を持つ。

日本人、日本文化などの観念についても同様である。これらについて論じる場合、日本人、日本文化が実体として存在するように思われるが、指し示すことができる日本人、日本文化そのものというものが実体として存在するわけではない。言葉は、触手できる対象に対する名付けを重要な要素として成立しているように思われるため、言葉があ

ればそれに対応するものが実体として存在すると思ひこみがちなのである。日本人という表現は、外国人と区別されるものとして誕生し、それが食事方法、容姿外見などの内在的關係性のない別の差異と関係づけられ一つの觀念となる。ここでも恣意性、規範性、変化性がつきまとう。日本人を食生活の様態と関係付け、日本人は米を主食とする、と表現すれば、米を嫌って食さない人は日本人から排除されるだろう。もちろん、だからといって、何も排除せず、規範性もなく語ることではできない。主語に述語を付加することで意味が成り立つという言語の形式は、ある差異に別の差異を対応させることを予定しており、そこには必ず恣意性、規範性が付随し、それを徹底的に忌避しようとすれば、語ることを止める以外に術はないからである。

こうしたことは、保守主義、自由主義などのイデオロギーに対しても成り立つ。政治的象徴として扱われる言葉は、政治闘争の舞台にあつて、常に毀誉褒貶の対象となる。モナルコマキ、ホイッグなどの言葉の成立過程からも窺えるように、党派の名称や、イデオロギーの名称は、敵対する党派から侮蔑的に名付けられる場合が少なくない。名付けられた側は、その名付けを忌避したり、或いはむしろ、その侮蔑的名称をプラスの意味に転じるように、様々なよい意味に分節され差異化された言葉をあてがう。言葉の投げつけ合いの過程で、分節された表現の集合であるその言葉は実体性を帯びるかのような印象を強くする。「くたばれ新自由主義」という壁に貼り付けられたステッカーを目にしたり、「イラク戦争はネオ・コンサーヴァティブが主導した」と聴くたびに、それらは実体化されがちである。だが、これらは指し示すことができる実体性を持つわけではない。

既に別稿でも触れたが、例えば、liberalism という言葉を考えてみよう。²⁾liberty & libertas, libertine という言葉の歴史は古いが、liberal が政治の言葉として用いられ、liberalism という言葉が誕生したのは一九世紀の前半のことである。従つて、それ以降、二世紀に近い期間、liberalism という言葉は、書物で用いられ、日常、巷間に発せられた

ことになる。だが、外見的な同一性があるとしても、そこで含意されるものは同一ではない。一九世紀において liberal, liberalism という言葉は、一方では、信教などについて自由に各自の見解を発することを容認すること、他方で、重商主義的規制に拘束されず、自由に経済的利益を追求することを含意した。総じて、古典的自由主義と理解されている内容である。それに対して二〇世紀のリベリズム、特にアメリカ的文脈で理解されるリベリズムは、政府の社会への積極的介入を通じた不平等の是正などを含意し、国家に期待する役割に限れば、古典的なりベリズムとは正反對に位置する。このことをもってしばしばリベリズムは「変容した(transformed)」と語られる。³⁾しかし、ここで実際に生じているのは、リベリズムという言葉によつて意味されるもの、つまりは対応させられる差異が変更されたということであり、同一なものとして存在するのは「リベリズム」という言葉だけであり、その言葉に対応する同一主体の存在を連想させる「変容」という言葉は比喩的な表現に過ぎない。

このように意味される事柄が変化する対象に対し、その確固とした姿を記述することを目指す場合、意味される事柄の中に何か一貫したコアを仮設するという方法もある。つまり、対応させられる様々な事柄の中から、何かを恣意的、規範的に選択し、それを軸に物語をつくるという方法である。⁴⁾リベリズムの場合であれば、例えば広く liberals idealism が対応させられ、その中にリベリズムのコアが探索される。そうした観念の歴史はリベリズムという言葉の誕生より遙かに古い。そのためリベリズムという現象は、この用語が用いられる以前に生じていると捉えられるようになる。実際、リベリズムについての殆どの著述は、リベリズムという言葉が生まれる一九世紀よりも遙か以前に、その起源を求めている。

イデオロギーを構成する諸観念の結びつきが本質的に恣意的なものであるならば、その結び方を評価する基準は、リアリティとの一致の度合いではなく、そうした語り方をする⁵⁾こと、つまりそうした規範性を設定することの適切さ

以外にはない。そして、その適切さは、時代状況をどのように解釈するかということとの関連で決まる。⁵⁾ 保守主義の境界を題材に、この問題を考察してゆく。

二 ヨーロッパにおける保守主義

概念的にみれば、*conserve* という言葉は、フランス革命の成果が崩れ始めた頃は、革命の理念を保守しようとする革命派によっても用いられていた。⁶⁾ それが守旧派の言語象徴として確定した契機は、周知のように、一八一八年、シャトーブリアンが自ら編集した雑誌に *Conservateur* という名を与えたことであった。「保守する」ということの含意は、一般的には現状 (*status quo*) を維持するということであるが、政治的な現状は、時代、地域の政治文化の違いによって異なる。保守主義が含意するものを今後、どのように定めるのが今の時代に適合的なのかを考察する前提として、これまでそれがどのように定められてきたかを確認しよう。

イギリスの場合、トーリーとホイッグの伝統の延長上に保守党、自由党の二大政党が形成された。トーリーが保守党を名乗るのは一八三〇年のことである。但し、この時トーリーが保守主義を独占的に代表したわけではなかった。保守と分節、対照させられたのは急進派 (*Radicals*) であり、保守と急進の境界は、トーリーとホイッグの境界とは一致しなかったからである。実際、バークもホイッグに属す政治家であったし、哲学的急進主義の合理主義を激しく批判したマコーリイもホイッグの政治家であった。一九世紀イギリスにおいて保守主義は、対岸に起きた革命を回避し、現状を維持し、議会と国王が一体化した英国国制の伝統を継承発展させることを目標とし、それを弁証するために道徳、歴史、伝統、宗教などの語彙を好んで用いた。J・S・ミルは、一八四〇年のコールリッジについての論考の中

で幾度か conservative という用語を用いているが、それは革新的 (innovative) の対立概念として用いられている。そしてミルは、コールリッジの思想を、一八世紀哲学に対する反抗であり、一八世紀哲学が革新的、世俗的、抽象的、形而上学的、散文的であったのに対して、コールリッジの思想は、「保守的で」、宗教的で、具体的で、歴史的で、詩的であると論じた。⁷⁾ ミルにとつても保守的であるということは、人々に共通する感情、伝統に注目しながら、社会の安定性を重視することであり、階級の利益に第一義的に結びつくべきものではなかつた。

それに対して急進的な革命が一端実現してしまつたフランスでは、保守主義の境界線は、今ある政治体制という意味での現状の維持を基準としては引かれ得ない。ある場合には、現状とは、急進的な共和政を意味するからである。そもそも一九世紀のフランス政治では、共和政の是非が圧倒的な政治的対立の軸となり、それを基準として政治的諸事項も差異化された。共和政に敵対するものは、「右(Droite)」と呼ばれ、この「右」は、共和政に代替すべき体制としてブルボンの王政を据えるか、帝政であるのかなどを巡り、正統派、オルレアン派、ポナバルト派に分かれた。正統的なド・メーストルにとつては、ルイ一八世による復古王政の「憲章」でさえ、伝統的な原理を傷つけるものとして排斥されるべきものであつた。これら各派は、それぞれ極右、保守的右派、自由主義的右派という区分に対応させることもできる。⁸⁾ つまり自由主義的な勢力も「右」には含まれ得た。フランスは、保守主義という言葉を生み出した地ではあるものの、こうした事情からか、フランス革命に反抗した思想は、現在一般に「伝統主義(traditionalisme)」「反革命(contre-révolution)」と表現され、保守主義とは表象されない。⁹⁾ そして伝統主義の境界は、共和政の是非と対応させられ、社会階級と重なるものではなかつた。¹⁰⁾ 歴史の具体的な事情を見ると、右派、或いは保守主義的な運動を構成した者達の出自は伝統的身分に限定されるわけではなく、下級聖職者、新興ブルジョワ、職人や農民すらそこには見いだすことができたのである。¹¹⁾

こうして一九世紀において、イギリス的な保守主義と、フランス的な伝統主義、反革命とでは、その境界線の引き方は一致しない。ではドイツの場合はどうだろう。フランス革命勃発の報に接してドイツで欣喜雀躍したのは啓蒙思想の継承者たちと、若いロマン主義者達であった。彼らは閉塞感漂う状況をフランス革命のうねりが一気に晴らしてくれることを期待した。しかし革命後の道徳的荒廃を見てロマン主義者は直ぐに反革命の立場に移行し、また革命の軍隊が諸邦に越境しそれを圧倒するに及んで、革命をドイツにおいて実現しようという運動は表舞台からは退いた。急進的なものが存在しないならば、それと分節される保守的なものは姿を現さない。一八三〇年を過ぎても、保守という概念は明確な意味を帯びることはなく、例えば、ロテックの『国家事典(Staats-Lexikon)』では、Liberalismus, Reaktion については浩瀚な記述が掲載されているが、Konseratismus という項目は存在しない。一八世紀末から一九世紀にかけ、諸邦で指導的地位に着くべき貴族層が、上からの変革を試み、その層が変化をもたらず主勢力となった。後にこの時代を振り返るとき、上からの改革の担い手を改良的保守主義と説明し、それに抵抗すべく領邦権力の浸透に対抗して、帝国の制度、文化を維持することを伝統的な保守主義と捉える見方も生まれた。

二〇世紀に入ると保守主義という言葉の反省化過程は徐々に進行する。一九一二年、L・H・セシルは、未知なるものを回避しようとする自然的な保守主義と、政治的な保守主義を区別し、前者は人間の本性に根ざしたものが、後者の政治的保守主義が姿を現すのは宗教改革以降であると論じた。そして政治的な保守主義として、トリー主義、帝国主義などを挙げつつ、それらの要素が一体となって現代的保守主義が形成されたのは一七九〇年であると説いた。¹²⁾政治上の保守主義は、まだ実在しない、ある価値を将来に向けて積極的に実現しようというものではないため、政治社会が安定している限り、体系的に分節化されたイデオロギーとしては現れ難い。安定した社会が大きな変動に晒されたとき、その変化の流れを押しとどめようという思想的営為として保守主義の教義が生み出される。近代ヨ一

ロッパにおいて、そうした変動を人々に知らしめる機能を果たしたのはフランス革命であり、そのため反革命の旗手として定着していたバークが現代保守主義の起源として再確認されることになった。但し、バーク自身は、a principle of conservation とどう表現は用いても、保守主義という言葉を政治的象徴として掲げたわけではない。政治的保守主義について反省的な考察がなされる過程で、「他の多くの歴史的事象と同様、保守主義という現象は、政治活動でその用語が用いられるよりも遙かに先立つ」という捉え方が確立し、保守主義という用語の有無に拘束されることなく、保守主義について語られるようになったのである。¹¹⁾

こうしたなか、マンハイムは、伝統主義と保守主義を区別し、伝統主義が旧来の慣習、価値観を踏襲しようとするものであるのに対して、保守主義は没落してゆく貴族階級の階級イデオロギーとして個性化しうるものと断定した。そしてこうした保守主義は、全体の個人に対する優越、位階的な神的秩序の存在などを特徴とするものと一般に理解される。だが、ミネルヴァの梟の喩えのように、マンハイムの著作が刊行された一九二六年、身分制社会は消滅しつつあり、リベラルデモクラシーの到来が間近に迫っていた。さらに一九二六年という年号が端的に示しているように、全体主義、そして社会主義の敗北に至る二〇世紀のイデオロギー状況はマンハイムの議論には当初から射程に含まれていない。マンハイムが規定したような保守主義は、二〇世紀初頭には終わりを告げたとされ、「没落する貴族階級の消極的、防衛的な立場」という意味での保守主義のタイムスパンは、「おおよそ一七九〇年から一九一四年」であると論じられる。¹²⁾ 現代では、一九七〇年代にイングルハートが、「静かな革命」で論じたように、変化の軸の解釈によつては、労働者階級こそが保守主義の温床であると論じることがあり得るのである。

第二次大戦後、欧米諸国はリベラルデモクラシーの時代に突入し、それが現状(status quo)として動かしがたいものとなる。そして、より一層の変化を求める社会主義に対して、この現状を維持することが保守主義の新たな含意とな

るよう期待された。この試みはイギリスにおいては、既に一九三三年に F・J・C・ハーンショウによりなされている。ハーンショウは、力を増しつつある社会主義に対抗するのは自由主義ではなく保守主義であるべきだという目的意識から、保守主義をより歴史的で強固なイデオロギーとして確立すべく、保守主義の歴史を一六世紀から辿っている。そして、その記述の多くの部分はフランス革命以前にあてられた。¹⁶⁾ 大戦後の著作として先ず挙げられるのが、一九五三年にアメリカで刊行された R・カークの『保守主義の精神』である。またヨーロッパで新たな保守主義を掲げた思想家としては、まずオークショットを挙げよう。オークショットは一九六二年、『政治における合理主義』を刊行し、人間理性によって合理的に世界を構築できるといふ、啓蒙思想以来持続してきた合理的な思想を批判し、むしろ人間が蓄積してきた伝統的な知見に依るべきことを説いた。こうした思考は、A・クイントンなどにも継承され、クイントンは、『完成不可能性の政治学(The Politics of imperfection)』を一九七八年に刊行し、合理主義的な思考を支えているのは、人間の完成可能性を目指す思想であり、それが全体主義、国家主義に繋がると捉え、政治的思惟においては、完成可能性を否定することが肝要であり、それが保守主義的な思考であると論じた。マンハイムのように、保守主義を没落する貴族階級のイデオロギーと捉えるのであれば、保守主義の起源は、反革命の旗手としてのバークに置かれるが、リベラルデモクラシーの現状を許容し、理性批判、完成可能性の否定こそが保守主義の本質であると措定するならば、その源流は、啓蒙的合理主義に対する批判を軸として探索され、そこにはかつては自由主義の流れに位置づけられていた思想家も対象とされるだろう。イギリスではヒューム、更にはフッカーが保守主義の重要な思想家と扱われることになった。¹⁶⁾ 保守主義の観念を現在どのようにつぶかにより、保守主義の過去から現在に至るストーリーは姿を変えたのである。

但し、イギリスの場合、保守党の存在を軸として、マンハイム的な古い保守主義は、幾つかの段階を経ながら、福

社国家の進展とともに、パターナリズムを支柱とする、リベラルデモクラシーの保守主義へと緩やかに変貌した。理論的にも、個人主義を根底に据える自由主義に対して、保守主義は、社会や集団の価値を高く評価するという点で一貫していると理解でき、また、性悪説的人間観、有機的社会観、伝統への崇敬などの点でも一貫していたと捉えることができたのである。

そうした状況を揺るがしたのがサッチャーによる政権獲得であり、更にはアメリカにおけるレーガン政権の登場であった。サッチャー政権は、福祉国家体制という現状を否定し、自助の精神に依拠すべきことを説き、経済的にはケインズ主義を否定し、新古典派経済学に頼ろうとした。レーガン政権も経済政策においては同様の道を選択する。保守主義を掲げつつ、現状を維持するという意味での保守主義とは明らかに異質な政権の登場により、保守主義の性質について様々な議論が交わされることになった。ハーシマンは、マーシャルの議論を援用し、近代以降の市民的権利の発展には法の前の平等、普通選挙権の実現、福祉国家の達成という三つの段階があると論じる。そして、それぞれの段階にはそれぞれの反動が生じるのであり、サッチャー政権やレーガン政権は、三番目の段階である福祉国家への反動であると捉え、市民的権利の発展と「反動」という言葉で、フランス革命から一九八〇年代の保守主義までを統一した軸で捉えようとしている¹⁶⁾。但し、八〇年代の保守主義は、従来の保守主義とはやはり異質なものという理解が一般的である。サッチャー主義については、保守主義にニューライトの流れが流入したものという構図で理解される。例えば、ノーマン・P・バリーは、大恐慌以降、国家が社会領域に介入し雇用の確保をはかり、また様々な社会保険を充実させ、人々の暮らしの安定を実現するのが望ましいというのが、一般的なコンセンサスとなっていたが、それがインフレなどの危機的状況をもたらし、それに対する対応としてニューライトの政策がもたらされたと理解する¹⁷⁾。リベラリズムの変容について触れながら、リベラリズムを古典的リベラリズムの意味でバリーが用いようとした

ことは、政治過程でのニューライトと保守主義をあくまで区別しようという姿勢による。パリイによれば、ニューライトの知的推進力は無党派的な自由市場個人主義であり、それが保守思想の新しい流れと交流することでニューライトが生み出されたのであった。¹⁾

J・グレイも、ニューライトと保守思想とを峻別する。そして「古典的自由主義、或いは市場原理主義と私が呼ぶものは、マルクス主義と同様、啓蒙の試みの一種であり、歴史の偶然性や文化的差異を超克し、質的にこれまで全く存在しなかったような普遍的な文化を基礎づけようという試みである」と論じ、ニューライトの思想の中に、啓蒙的な合理主義との繋がりを見いだす。²⁾ グレイによれば、ニューライトの理論家は、文化的な伝統を無視しがちであり、その原因の一端は、ニューライトが古典的自由主義の合理主義的伝統に負っている部分があるからであり、市民社会の存続が人々に共通する観念や価値意識に依っているということに彼等は気づかないのである。³⁾ グレイは、保守主義とニューライトを区別することで、一八世紀イギリスで構築され、第二次大戦後ではオークションにより継承された liberal-conservative の立場を堅持し、更にそのスタンスで現代のグローバル化をニューライトの運動と重ね合わせ批判する。

ところで、このライトという言葉は時に保守主義と代替可能な用語と見なされる。但し、ライトはレフトとの相対的なポジションを第一義的には含意し、そのためライトとは何かを問い、その思想的潮流を追うことは、少なくとも英語圏では一般的ではない。一九世紀から二〇世紀にかけて保守主義とライトとはどのような関係にあったのだろうか。⁴⁾

保守主義と同様、ライト・レフトという軸もフランス革命を契機として生じた。議長席から見て議場の右側に席を占めた王政擁護派がライトと呼ばれたことは夙に知られている。従って、言葉の成立時においては、保守主義とライ

トは指し示す対象という点では殆ど重なり合うべきものであった。²⁵しかし、実際には二つの言葉は、ずれを伴うものとなつてゐる。例えば、ファシズムやナチズムなどは、ライトの運動であるといつてよいが、保守主義という言葉が現状で持つニュアンスとは一致しない。また改良的な保守主義に分類される思想や運動も、ライトという言葉の語感とは現状では即応してゐない。さらに、フランスでは、「伝統主義の歴史はライトの歴史とは重なり合わず、全てのライトのものは殆ど伝統主義を主張することはなく、ライトはますますオルレアン主義により支配されるようになった」と語られる。²⁶フランスでは反共和政の勢力は保守主義という言葉ではなく、伝統主義、反革命と呼ばれるが、それとライトは使い分けられてゐる。あるいは、ドイツでは、ネオナチなど移民を暴力的にでも排除しようとする運動を極右(Rechtsextremismus)と呼び、保守主義という枠では捉えられてゐない。それに対して全体主義的な運動が活性化しなかつたアングロサクソンの国々を対象とする場合は、ライトと保守は歴史的に重なり合うものと捉えられてきた。例えば、ダウングズは、ライト・レフトの基準を、経済に対する介入の度合いによつてはかることができると論じ、ライトという言葉が保守主義と代替可能な言葉として用いてゐる。²⁷

但し、イギリスの場合も、一九八〇年代のサッチャー政治のように、従来の保守主義の枠では捉えられない思想、動向が生じたときには、従来の保守主義のそれと区別するために、ニュー・ライトという名称が用いられる。またアメリカでもニュー・ライトという表現が用いられるが、強制バス通学への反対、人工妊娠中絶への反対、同性愛への反対など、大戦後のコンセンサスをドラスティックに破壊しようとする動向に対してこの名称は用いられてゐる。²⁸総じていえば、身分制や伝統の維持などの確立した保守主義の像には収まりきらない思想や運動を指示する際、ライトという用語が用いられる傾向があり、中でも保守主義的な政策を、断固として、ドラスティックに実現しようとする思想、運動にライトという名称が与えられる場合が多い。

三 アメリカにおける保守主義

G・H・ナツシュは、その著作の序で、「一九四五年において、明確で、統制のとれた、目に見える保守主義の知的な力は、アメリカには存在しなかった」と述べている。⁹⁸⁾ また J・L・ヒメルシュタインも、アメリカの保守主義は、ニューデールの革命的状況に対する反動として生まれたのであり、「三〇〇年程の歴史を持つものだ」と一九九〇年に書き記している。⁹⁹⁾ しかし、アメリカ保守主義の思想史を繙くと、アメリカの保守主義は、アメリカ革命に起源があると説明される場合が少なくない。それはどのような事情によるのだろうか。

アメリカの現代保守主義は、反共産主義、反ニューデールの思潮として一九三〇年代に形をとるようになった。但し、それを広く流布する形で明確に表明したものとして挙げられるのは一九四四年に刊行されたハイエクの『隷従への道』である。¹⁰⁰⁾ ハイエクの書物は、当時ハイエクの活動場所であったイギリスでは評価されなかったが、反ニューデールの書物を望んでいたアメリカでは大きな反響を起こした。もちろん周知のように、ハイエク自身は、一九五九年に書きあらわされた『自由の条件』に、「なぜ私は保守主義者ではないのか」という追記を加え、保守主義は、流れを緩和したりせき止めたりしても、我々が進んで行く方向に対しての選択肢を与えることはないという趣旨を、保守主義に与しない理由としてあげている。また六〇年代以降、neoconservative と称された人たちも、A・クリストルなどを除くと、当初から自分たちのことを快くすんでそう呼んだわけではなかった。ヨーロッパで前半生を過ごしてきたハイエクが保守主義という言葉に否定的なイメージを持っていたのは頷けるとして、このことは、アメリカでも保守主義という言葉象徴が必ずしも肯定的に受け取られていたわけではなかったことを示唆している。今日の保守

主義が掲げる理論、価値意識などは以前から存在したが、それを保守主義という名称で捉える環境は以前には存在しなかった。実際、リベラルという言葉に対して、アメリカでコンサーバティブという言葉が好ましいものと受け止める感覚が定着しはじめるのは、六〇年代以降のことであつた。⁽²²⁾それまで、ニューデイルやジョンソンの「偉大な社会」に象徴される国家主導のリベリズムに抵抗感を覚える論者達は、コンサーバティブという言葉をプラスのシンボルに転じるような営為を試みたのである。

その五〇年代の試みとして、カークの『保守主義の精神』がある。⁽²³⁾カークは、イギリス的伝統に依りながら保守主義をプラスシンボルに転じようとし、アメリカの保守主義とイギリスの保守主義が元来親和的なものであつたことを示した。その際カークは、自由主義と保守主義とを対立的に捉えるという従来の構図に従っている。その構図に従いつつ保守主義をプラスシンボルとするためには、バーク的な保守主義から身分制社会の擁護という側面を希釈し、いわば「哲学的保守主義」として保守主義を提示する必要がある。そこでカークは、保守主義的なものはバーク的な時に耐えた規範とリベラルな観念との合体であり、それは古いトーリー主義(Old Toryism)とは異なるものであると論じる。(King, p.74)だが、バーク的な保守主義をアメリカ的な保守主義の起源と同一視することは抵抗がないわけではない。一九五五年、リベリズムの側から、アメリカの政治的伝統はリベリズムの伝統であるということを再確認する、R・ハーツの『アメリカ自由主義の伝統』が刊行される。ハーツによれば、封建的伝統を欠くアメリカ社会では、ロッキ的な自由主義が政治的伝統なのである。またC・ロシターは、ヨーロッパでの自由主義の伝統とアメリカの保守主義とが対立するものではなく、むしろ自由主義のアメリカ的表現としてアメリカの保守主義があることを明らかにしようとした。⁽²⁴⁾ロシターによれば、保守主義と自由主義の差異は、つまるところ、「両者とも、西欧世界で経験されて来たような自由を優先するが、保守主義者が自由を維持すべきものと考えるのに対して、自由主義者は、それ

を拡大すべきものにとらえる」ところにあると論じる。(Rosser, p.57) そしてロシターは、「アメリカの政治的伝統は基本的には自由主義的伝統である」(p.11)と断じつつも、そうであるとしても「その中には哲学的保守主義の深い流れがある」(p.12)と論じ、自由主義的な流れと調和的に存在する保守主義的な流れを指摘した。

六〇年代を通じて、ニューディールのリベリズムは更に発展し、その極端な現れとして、ヒッピー、同性愛、学生の大反乱などが社会現象として人々の耳目を集めるようになった。これに対し、墮胎、同性愛などの制限は基本的モラルであるとして強い反感が一部に生じる。個別的な事象に対しての強い感情を多数の人々に共有させるためには、他の事象をそれに様々に絡ませ、一つのストーリーを創造することが有効である。例えば、強い競争原理に支配されるビジネスの世界が市民生活の領域までをヘゲモニー的に支配するならば、自己の行動の社会的影響を考慮せず、ただ自己の欲求のみを充足しようという行為が増大し、ひいては墮胎や同性愛に繋がるが、これはリベリズムでは救済し得ない道徳的退廃であると説かれた。思想的に見て、リベリズムが道徳的放縦を推奨したり、放任するわけではないが、保守的思想が道徳問題を積極的、声高に取りあげ続けるならば、道徳問題は保守主義の専管事項であるように受け取られようになる。

保守主義の思想を彫琢する場合、カークやロシターが果たしたように、過去の事象を新たな観点から説明し、現在と関連づけストーリー化するという作業が重要となる。既にカークは、「アメリカ革命は革新的な騒擾ではなく、植民地の権利の保守的な回復であった」と論じている。³⁶ こうした一連の作業を通じてアメリカ革命にアメリカ保守主義の原点を見いだすという考え方が次第に定着した。そして標準的には次のように理解されることになった。

建国初期の、共和主義とフェデラリストの対立関係において、ジェファソン、マディソンなどの共和主義者が、フランス革命に際して革命派に共感を抱いたのに対して、フェデラリストは、英国的自由の遺産、歴史の教訓などに傾

値を認めた。このことを根拠として、フェデラリストが、アメリカ保守主義の原点であると捉えられた。とくにカークは、ジョン・アダムズこそ、アメリカにおける保守主義の始祖であると見なした。また同じフェデラリストに属するハミルトンも、その宗教や秩序に対する考え方が非常にバークに類似している点で、保守主義者の一人に数えられる。³⁶ その一方で、南部の保守主義の起源を辿る場合、ジェファソンも保守主義の源流であると見なされることがある。つまり、一九三〇年にランソンやテートなどの南部知識人により著された "I'll take my stand" では、産業的価値に対して農業的価値が称揚され、州権論が説かれているが、そうした南部的精神の淵源を辿ると、「大地で働く人々こそ神から選ばれた人々である」と説いたジェファソンに行きつくと考えられるのである。³⁷

南北の内戦は、アメリカ保守主義の歴史に一つの転機を与えたと考えられている。南部の指導者達の中には、例えば、「保守的的反動を開始する」と宣言し、自らを保守主義者と捉え、バークの思想によりながら、北部との対立に正当性を与えようとした。マッキグロツソは、フェデラリスト以来、アメリカの保守主義は、強く積極的な中央政府を求めてきたが、いまやそうした立場は逆転され、新しい保守主義は伝統に不寛容であり、急速で安定しない変化を先導し、固定化した。そうした変化は、それよりも大きな変化の肥やしとなるものであったと論じている。³⁸ 二大政党制のどちらかにより代表されるのでも、階級によつて代表されるのでもない保守主義が、思想的な立場を逆転させ、保守主義はもはや保守しようとしなくなった、という記述にはイデオロギーを巡るストーリーの恣意性が端的に表現されているといつてよい。³⁹

三〇年代から五〇年代までのアメリカ保守主義は、反共、反国家介入により特徴づけられ、それは殆ど古典的自由主義と重なり合うものであった。そのため、B・クリックのように、アメリカの保守主義は実はリベリズムに他ならないと解釈されることも珍しくはない。⁴⁰ 但し、五〇年代の半ばを過ぎる頃から保守主義の中にも様々な流れが現れ

るようになる。反共産主義のためにはむしろ国家に重要な役割を担わせるべきという意識が強まり、big government conservatism の流れが生まれる。そして七〇年代以降、当初は民主党に荷担していたものの、リベラリズムが共同体や道徳観念を崩壊に導くとして袂を分かち、共和党支持に転換した新保守主義、ニクソンやフォードの政策に満足できず、より確固とした保守性を求めたニューライトと呼ばれた運動、宗教色の濃いライト(New Religious Right)などが次々と現れている。

諸国家における多様な保守主義の思想、運動はどのように整理解解することができ、またどこに保守性の境界線を引くことができるのだろうか。

四 保守主義のタイプロジーと境界

古くは一九六六年、エプシュタインは、理念型として、①現状維持、②改良的保守主義、③反動という三つの類型を保守主義について示した。⁹¹また、多様な保守主義の様相に際して、保守主義の本質的なものを掴むという観点から、一九七六年、オサリバンは、人間の完成可能性を懐疑的に捉えるところに保守主義の本質があると論じ、不完全性の表現には三つのタイプがあるとして、第一に、神の完全性に対して、人間は不完全なものに過ぎず、完全性を靈的な世界に求めねばならないとする、バーク以来の最も古いタイプの流れ、第二に、不完全な人間は、歴史の発展法則を見いだす中に完全性を求めねばならないという、ドイツロマン主義に典型的に見られるタイプ、そして第三に、ヒュームなどに見られるように、完全性を求める場所はそもそも存在しないという懐疑主義的なものを挙げている。⁹²

こうしたタイプロジーは主としてヨーロッパの保守的思想を念頭においていたが、七〇年代以降のアメリカでの保

守主義の台頭を背景に、アメリカの保守主義を対象としても様々なタイプロジーが提示されてきている。例えば、ナツシュは、アメリカの保守主義には、第一に、古典的自由主義、第二に、カークなどに代表される伝統主義、第三に福音主義的な反共産主義などの潮流が存在したと整理している。佐々木も、マスコミに広く見られる分析として、五つのグループがあるとして、①共和党エスタブリッシュメント、② Old Right、③新保守主義、④ New Right、⑤キリスト教ニューライトをあげている。⁴³これは共和党の展開を軸にして整理する際には理解しやすい分類といえる。但し、これは現実の政治グループの分類であつて、その保守思想の特徴の整理に基づくものでは必ずしもなく、例えばシュトラウスやその影響を受けた者達がどこに整理されるのかは明確ではない。そうしたことも考慮して、ダンとウツダードは、①伝統主義者、②経済的保守主義、③反共産主義の保守主義、④新保守主義、⑤古典的保守主義、という五つのタイプの保守主義をあげている。⁴⁴

では、保守主義全般について、どのように整理できるだろうか。ギデンスは主として現代の米英の保守主義を視野に入れつつ、①古い保守主義、②哲学的保守主義、③新保守主義 neo-conservative、④新自由主義 neo-liberalism という整理を提示している。⁴⁵ヴァンセントは、こうした多様な議論のあり方を幾つかの角度から整理し、概念内容を軸とした研究には、①一つの純粹な保守主義の教義があるとする立場、②多様な保守主義の流れがあるとする立場があると論じている。⁴⁶前者には、例えば A・クイントンのように、完成可能性を否定することが保守主義の核であるとするような議論が含まれる。多様な保守主義の流れがあるとする立場についてヴァンセントは様々な保守主義の分類が企図されているとして、エプシュタインの分類や、リベラルな経験主義、リベラルな合理主義、反リベラルな直観主義という三分類などを紹介している。そして自らの分類の試みとして、①伝統主義的、②ロマン主義的、③パターンリステイック、④リベラル、⑤ニューライトの五つのタイプの保守主義を挙げる。

こうした整理では、保守主義と自称するものは原則として保守主義の一部を構成するものとされる。そして、保守主義を説得的なものにしようという試みでは、保守主義の含意は必然的に拡大する。⁴⁷しかし、保守主義という言葉の最も基本的な含意は、変化する状況にあつて、これまで存在してきた何かを保持するということにあるように思われる。⁴⁸例えばギデンスも、ライトという言葉は、現在では主に新自由主義 neoliberalism を対象としているが、新自由主義は何かを保守しようとしているわけではないのだから、「保守主義とライトは区別しなければならない」と論じている。⁴⁹

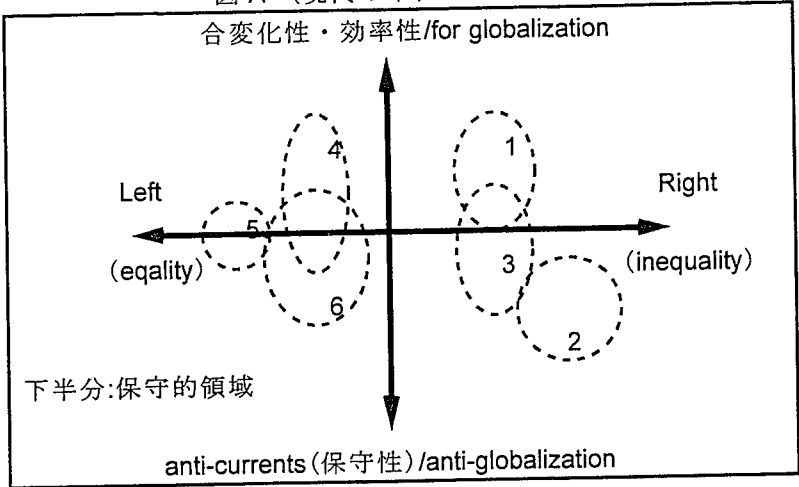
では現代の変化はどのような視座から捉えることができるのだろうか。先に触れたようにハーシュマンは、市民的権利の拡大を軸に近代化を理解し、保守的な思想をそれに対する反動として捉えた。自由権の確認、政治的権利の拡大、社会的権利の承認(福祉国家体制)という発展の構図は、近代化論で一般的である捉え方とも一致する。現在、政治、経済上の事象で、最も焦点となつてゐるのは、グローバル化の過程を社会的権利の承認と対立するものと捉えるのか、それともその次に置かれるべき段階と捉えるのかということである。グローバル化の過程が欧米化の拡張と伝統的文化の破壊、貧富の圧倒的な拡大を生みだしていることに着目するならば、社会的権利の承認の後にグローバル化を置くことは全く許容できないことに違いない。その一方で、グローバル化の過程が人間の想像力を刺激する不可逆の過程であり、同時に、移動、生産性、情報交換など、人間の行動の効率性を高める過程であるとして肯定的に捉えるならば、社会的権利の承認の後にはグローバル化が置かれることになるに違いない。本稿は、近代以降の主権国家の生成と浸透過程が、主権国家の永続化という終着点を迎えるとは考えられず、またこの過程は合理化、効率化の進展に呼応したものであつたという観点から、グローバル化の変化を、近代化の過程の延長上にあるものと捉える。この過程を国家の様態に焦点をあてて捉えるならば、国家形成・国民形成・権力の浸透↓参加・配分方法の検討↓グ

ローバル化、と整理できるだろう。⁹¹従って、イデオロギーの差異化は、グローバル化に対する対応を基準とすることで時代に適合的なものとなるに違いない。その際、反グローバル化には、ハースト、トンプソンのようにグローバル化の存在自体を否定するもの、グレイのようにグローバル化を多様な人間性を喪失する合理化と捉え批判する立場、またそれ以外にも主権国家に対するアイデンティティを強く求める動きなどが含まれる。

現代の英米において福祉国家を否定し、グローバル化を肯定する重要なグループとして新自由主義に代表されるライトがあり、福祉国家という status を維持し、グローバル化に異を唱えているグループとしてレフトがある。グローバル化の否定を保守的とするならば、ライトが進歩的で、レフトが保守的ということになるだろう。しかし、そう論じることに違和感がある。またライトとレフトに区別された政党が現実の諸問題を解決することができず、人々の支持を失いつつある今日、「伝統的なライトとレフトの区別は消滅しつつある」と論じることも可能だろう。⁹²但し、ポツピオなどは、ライトとレフトは、不平等を矯正しようとするのか、それともそれを助長しようとするのかを基準として成立し、その軸は堅持しなければならないと主張する。⁹³単に経済的な差異(不平等)だけでなく、人種や性別の差異を架橋できない溝と決めつけ、それに基づく不平等を固定化しようしたり、異なるものを集団から排除しようとするモメントを許容するかどうかは、依然として政治判断の重要な要素であるといつてよい。さらに、グローバル化の進展はB・バーバーが説いたような文化的な確執を生むとしても、グローバル化の過程に平等化へのモメントが合成されるならば、その文化的確執を文化的多様性の許容へと導いてゆくに違いない。⁹⁴

こうした二つの点を考慮して、本稿は図Aのように、変化する状況への対応を縦軸、平等、不平等の対立項を横軸とする平面を設定し、その平面の中にイデオロギーを配置して、相互の位置関係を明らかにする。⁹⁵図Bは、それを一九世紀に投影したものである。いずれにおいても、下半分を保守主義的な領域と置く。⁹⁶軸の設定は、複合的で関係的

図 A (現代のイデオロギー)



な対象に対して、ある特徴を恣意的に浮上させようとする試みである。そうした軸としては、他に、伝統、共同体、道徳観、家族、宗教、真理の存在可能性、理論と実践の関係、人間観等々が考えられるが、本稿はその中でこの二つの軸をイデオロギーの配置を理解する上で最も基本的なものと指差し選択した。⁽⁵⁶⁾

1 新自由主義…ここでは広義に解釈し、国家の権限を抑え、自由放任を信条とする思想を新自由主義とする。ハイエク、フリードマンなどの経済学、リバタリアンなどがここには含まれることになる。グローバル化を積極的に進めるが、それによって生じる経済的な不平等の拡大を問題視する姿勢を欠く。⁽⁵⁷⁾

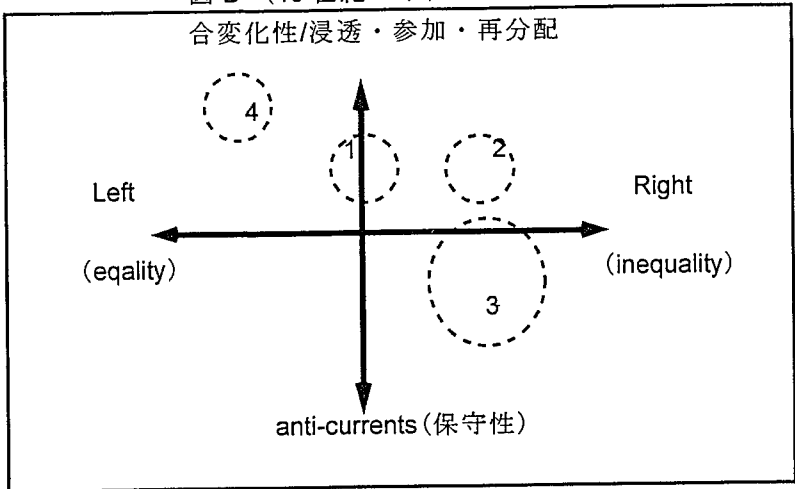
2 極右…人種的な不平等を肯定する。また主権国家に対する忠誠を軸にアイデンティティを形成することを要求する。

3 新保守主義(アメリカ)…新保守主義 neo-conservatism と呼ばれるグループは一枚岩的なものではない。産業社会の展開の過程で伝統的な道徳が衰退したことを重大な問題としてとりあげ、伝統的な価値意識の回復を説く。そこには人種的な不平等も含まれる場合がある。

また新自由主義と比較して big government conservative とある(ハ)

図 B (19世紀のイデオロギー)

合変化性/浸透・参加・再分配



とが多い。

4 第三の道(イギリス)・・効率性と公正さを掲げる。基本的には平等性を志向するが、それは強いものではない。グローバル化を必然的な過程と捉え、それをプラスに活用することを目指す点で合变化的。

5 フェミニニズム・・平等性に対する強い志向性。

6 社会民主主義(ヨーロッパ)

1 一八一―一九世紀古典的自由主義・・伝統的身分に対しては平等性を志向するが、労働者階級にまでそれを拡大することには抑制的。国内経済と貿易の発展を目指す点で変化に積極的。

2 改良的保守主義・・伝統的身分社会を根源的には変更せず、改良することを目指す点で不平等と徹底して対峙する姿勢に欠ける。主権国家の発展という歴史的状況に対応しようという点で変化に対して前向きに臨む。⁽⁹⁾

3 ロマン主義的保守主義・・中世的世界を憧憬し、伝統的身分社会を維持しようとする。文学的領域に限定して捉える場合には多様ではないが、例えばミューラーなども含める場合、経済学への関心など、その動向は多様化する。

4 社会主義・平等に対する強い志向性。社会主義への道を歴史的発展に沿うものと捉える。

五 おわりに

政治的なものは、こうしたイデオロギーの配置とどのような関係を持つのだろうか。中世の重層的な構造から近代国家が析出する過程は、主権国家を単位として人間が集会的な力を飛躍的に増幅させるようになる過程であり、その力を目的に操作するために政治的なものが、古典古代以来、再び脚光を浴びるようになる。但し、古典古代の政治が、シンプルな共同体から目的的な人々の協働を編み出すことと深くかかわったのに対して、近代的な協働は、共通の目的が意識されない経済的分業とそれを馴致する目的的な秩序形成という二つの側面を持ち、政治的なものは専ら後者の秩序形成を対象とするものと捉えられた。アレントやシュトラウスなどに典型的に見られるように、古典古代の政治的なものを近代に読みとり、現代に再生させようという試みが様々になされた来だが、二つの側面を二つの領域と置き、政治的なものは目的的な秩序形成とのみ係わると断定するならば、古代的な政治は、経済的分業が人々の意識から遠のく非日常的な革命状況にしか現実には見いだされないことにもなる。

グローバル化の進展は、協働の一側面である経済的分業が主権国家の領域を透過し拡大することを意味する。その際、目的的な秩序形成の主体には、旧来の主権国家、そしてグローバルな人々のコミュニケーションのネットワーク（「グローバル市民社会」という二つが予想される。従来の政治や政治思想（イデオロギー）は主権国家を舞台としており、グローバル市民社会で従来の主体がどのように行動し、どのように評価されるかも未知数である。例えば宗教的な要素は常に保守的なものと結びつけられて理解されてきた。それは、先ず第一に、一般に宗教組織が集権国家の確

立に敵対する立場を堅持してきたことが根底にある。典型的にフランスの場合に見られるように、国家の主権的権力の浸透はカトリック教会との様々な闘争の結果もたらされたものであった。また第二に、聖職者という身分が伝統的身分の一角を構成していたということ、そして第三にキリスト教が、道徳面において物質的価値意識を抑制する機能を果たしえたということも要因としてあげられよう。また第四に、ヨーロッパ各地に点在し、市民に常に開かれてきた教会堂が伝統文化の重要な担い手であり続けてきたことも忘れることはできない。総じて、一九世紀から二〇世紀にかけては、主権的権力の浸透を軸として合変化性が理解され、キリスト教会は、それに対立するという観点から保守性を持つものと解されてきた。しかし、グローバル化の進展で、合変化性の基準が変わるとき、捉え方に変化が生じる可能性も捨てがたい。キリスト教会は、グローバル化の進展に際して、普遍宗教である特性を活用するならば、合変化性を発揮することも考えられるからである。

【注】

- (1) アイデンティティや自我についての論説は膨大であるが、この行論では特に次を参照。Charles Taylor, *Sources of the Self*, Harvard University Press, 1989. テッサ・モリス＝鈴木『辺境から眺める』みすず書房、二〇〇〇年。小熊英二『民主』と『愛国』新曜社、二〇〇二年。
- (2) 升信夫「自由主義」、福田・谷口編『デモクラシーの政治学』（東京大学出版会、二〇〇三年）所収。
- (3) Larry Johnston, *Ideologies*, broadview press, 1996, p.83.
- (4) 例えば共和主義とは何か捉えようとする場合、次が考えられる。
 - ①ローマなど、共和主義の古代起源での意味を再現しようとする。
 - ②古代における意味と、近代において捉えられる古代共和主義との意味の変化に注目する。

③現在の価値意識に基づき共和政を定義し、それを過去に投影する。

歴史解釈が過去に語りかけ、過去を再構成しようとするものであれば、例えば古代ローマ自体と、一八世紀における古代ローマ解釈との間にはずれが生じる。従って、モンテスキューの共和主義理解には、モンテスキュー自身の価値意識、恣意性が加わり、古代ローマの共和政自体とそれとは同一ではない。②の立場は、そうしたずれを概念史として思想の歴史の中に探り出そうとするものである。(例えば、福田有広「共和主義」、福田・谷口編『デモクラシーの政治学』所収。) また③の典型的な例として次をあげることができる。Philip Pettit, *Republicanism*, Oxford, 1997.

(5) 松井やよりはその永訣の書の中で、戦後日本の思想の流れを三つに分け、①「自由主義史観派」に代表されるような、軍国主義、国粹主義を唱える流れ、②経済成長至上主義、③平和憲法、民主主義擁護派、を挙げている。松井は、現在も尚、様々な基本権を蹂躪されている世界の女性の幸福を願い、各地で続く戦乱に終止符を打つためには、三番目の流れが大きなものとしなければならないという規範意識を支えられ、こうした分類を行った。もちろん、そうした三つの流れが実体として存在するわけではない。この分類が適切なものであるかは、松井の願望がこの時代に適合的なものかどうかによつてきまる。(松井やより『愛と怒り戦う勇氣』岩波書店、二〇〇三年、二三四頁)

(6) Rudolf Vierhaus, *Konservatismus*, in *Geschichtliche Grundbegriffe*, Klett-cotta, 1972.

(7) *Mill on Bentham and Coleridge*, Cambridge University Press, 1980, p.108.

(8) Nicholas Atkin and Frank Tallet ed., *The Right in France*, pp.12-13.

(9) マンハイムは伝統主義と保守主義とを区別したが、フランスでの伝統主義は、マンハイムの用語法には従っていない。

(10) Jean Touchard, *Histoire des Idées politiques*, Tome2, Presses Universitaires de France, 14e edition, 1998, p. 541.

(11) そうしたフランスの反革命についてフィリップは、反革命は変化してもその中に三つの一定した要素が含まれているとして、自然的秩序の観念、歴史への崇敬、不平等の肯定を挙げてゐる。(Loïc Philip, *Histoire de la Pense Politique en France*, Economica, 1993, p.53-54)

- (12) Lord Hugh Cecil, *Conservatism*, Williams & Norgate, 1912 (reprint 1927), p.39.
- (13) Jerry Z. Muller, *Conservatism*, Princeton University Press, 1997, p.26.
- (14) Andrew Vincent, *Modern Political Ideologies*, Blackwell, 1995, p.56. A・ギデンズは「こうした保守主義を「古い保守主義」と表現し、「位階制度、貴族制度、集団や国家の個人に対する優位、神聖なものに対する過度の評価」がその意味であると論じつつ、そうした古い保守主義は「依るべき古い社会制度がもはや存在しない以上、「死んだ」と論じている。(Anthony Giddens, *Beyond Left and Right*, 1994, Stanford, pp.24-27) そして伝統、権威などを軸に「バーク以来の保守主義の伝統を説く議論を、そうした古い保守主義と区別して「哲学的保守主義」と呼んでいる。
- (15) F.J.C. Hearnshaw, *Conservatism in England*, Macmillan, 1933.
- (16) フッカーへの言及はカーンの著作にもあるが、フッカーの重要性を強調したのはA・クイントンである。(A. Quinton, *The Politics of Imperfection*, Faber, 1978) また「トラーはジョームの意義を強調する。(Jerry Z. Muller, op.cit.)
- (17) Frank O'Gorman, *British Conservatism*, Longman, 1986.
- (18) Alberto O. Hirschman, *The Rhetoric of Reaction*, The Belknap Press, 1991.
- (19) サッチャー政権をどのように捉えるかについては現在も様々な捉え方がある。例えば、サッチャーの前任者であるヒースの方が、保守党の伝統から逸脱したのであり、サッチャーは保守党の伝統に回帰したに過ぎないという考え方もある。レットウィンは、サッチャーは、道徳観、家族的な価値の強調、経済領域への介入を最小限に抑えようとはしていないことなどをもって、伝統的な保守主義の流れに属すものと論じた。(Shirley Robin Letwin, *The Anatomy of Thatcherism*, Fontana, 1992) ギデンズは、「伝統的保守が道徳的個人主義を評価することはないなどの点で、ニューライトと伝統的な保守主義の間には関係があるとは思えない」とレットウィンを批判した。(Giddens, op.cit., p.40) また、J・グレイは次のように論じている。「一九八〇年代の西側世界を通じて、最も顕著で、かつ最も予期されていなかった形で展開した政治的思想、実践は「保守主義をニューライトの諸観念や教義が征服したことであった。」(John Gray, *Post-liberalism*, Routledge, 1993, p.272) そしてグレイは、「グラムシの用語を借りつつ、保守主義においてニューライトがヘゲモニー

を確立したと論じている。様々な捉え方については、エバンスの簡潔な紹介を参照。(Brendan Evance, *Thatcherism and British Politics 1975-1999*, Sutton Publishing, 1999, ch.8)

(20) Norman P. Barry, *The New Right*, Iling & Sons Limited, 1987.

(21) バリーは、ソフisstoketaitoされた現代の保守主義と明らかに一致しないのは、抽象的自然権個人主義とベンサム功利主義の二つのひどく合理的な自由主義だけであると論じ、自由主義と保守主義が現代においては重なり合う傾向があると考えている。(Barry, op.cit., p.86)

(22) John Gray, *Enlightenment's Wake*, Routledge, 1995, p. 100.

(23) John Gray, *Post-Liberalism*, Routledge, 1993, p.273.

(24) Rightに対応する適切な日本語を見いだすことは難しい。右派、右翼という言葉が浮かぶが、右派というのは一般にある集団内部の配置を意味するために用い、また右翼は、日本では特殊な反動的思想を含蓄する場合が多い。よって本稿ではライトとそのままの語を用いることとする。

(25) R・レモンは、フランスにおいてライトは一八一五年に誕生したと、有力な議論を展開しているが、一般には、依然としてライト・レポートの起源は革命議会に求められる。(René Rémond, *La Droite en France*, Aubier, 1963)

(26) Jean Touchard, op.cit., p.542.

(27) *An Economic Theory of Democracy*, Addison-Wesley, 1957, p.116, p.128.

(28) 佐々木毅『現代アメリカの保守政治』岩波書店、一九八四年、第一章。

(29) George H. Nash, *The Conservative Intellectual Movement in America*. 1976.

(30) Jerome L. Himmelstein, *To the Right*, University of California Press, 1990, p.28.

(31) Charles W. Dunn, J.David Woodard, *The Conservative Tradition in America*, Rowman & Littlefield Publishers, 1996, p.16.

(32) 「バックレイの『ナショナルレビュー』が一九五五年にあらわれて漸くのこと、保守主義者は自分たちのことを保守主

義者と呼ぶようになった。」(Paul Lyons, *New Left, New Right*, Temple University Press, 1996, p.135) しばしば指摘されるように、アメリカで保守主義が政治的党派としてはつきりとした姿を現すのは一九六四年のゴールドウォーターの大統領選挙運動を通じてであった。五〇年代半ばから六〇年代にかけて、自由放任思想、伝統主義、反共産主義が結び合わり、アメリカ保守主義の基本形が形成されたのである。

(33) Russell Kirk, *The Conservative Mind*, 1953 (reprint2001).

(34) Clinton Rossiter, *Conservatism in America*, Random House, 1955.

(35) Kirk, op.cit., p.72.

(36) 但し、ハミルトンは、国家権力や経済政策についてはバーク的な保守主義とは一線を画している。そのことをもって、むしろド・メーストルとならび、権威的保守主義の一員であるとする考え方もある。Dunn and Woodard, op.cit., p.88.

(37) Brad Miner, *The Concise Conservative Encyclopedia*, Simon & Schuster, 1996, p.222.

(38) Robert Muccigrosso, *Basic History of American Conservatism*, Krieger, 2001, p.40.

(39) 現代的な関心に引きずられた恣意的な作業が成り立つのは、過去がそれ自体として客観的な意味を持つのではなく、過去を語る歴史家により意味を付与されるからである。つまり、過去は過去としてそれ自体として存在するだろうが、それ自体としては我々には何の意味も持たない。我々が、過去を知る、或いは過去について語ろうとするとき、過去は語られる以前に持った完結的な存在をやめ現代に蘇るのである。

(40) 古典的自由主義の論理は、アメリカという場に移植する場合には保守主義になると論じることができるとは、バークの思想は、近代化が遅れた地域を前提とする場合には保守主義とは呼ばないということも十分にありえることになる。これをどのように呼ぶかは、最終的には、その概念を用いて何を行いたいかということとの目的適合性の程度により決まるべきものといつてよい。そもそも意味するものと意味されるものとの関係は、恣意的である。従って、保守主義という言葉で何を含意するかについては、論理的に厳密な解答が存在するわけではない。例えば、保守主義という名称で、原理主義的な宗教家を含意させること、無政府主義者を含意させること、同性愛者を含意させること、いずれも論理的に否定でき

るわけではない。但し、保守主義という言葉で何を意味させるか、意味するものとされるものとの間に、適切さという評価を下す余地はあるように思える。その適切さの根拠は何だろうか。それは、論者が自ら明示的に語る時代状況の認識以外にはない。例えば、現在が社会主義を選択するかどうかの対立状況であれば、社会主義を拒否する態度を保守主義とおき、その歴史を過去に遡ることは適宜的であるように思われる。また現代をグローバル化の進展への賛否が問われる時代とおくならば、グローバル化を阻止しようとする立場を保守主義と置くことも適切性を持つ。

- (41) Klaus Epstein, 一七七〇年代にドイツの保守主義の起源を認め、メーザーの意義を強調したのは、ファリャフェックやエフシユタインであった。(Fritz Valjavec, *Die Entstehung der politischen Strömungen in Deutschland 1770-1815*, Oldenbourg, 1951. Klaus Epstein, *The Genesis of German Conservatism*, Princeton UP, 1966, p.7.) 但し、エフシユタインは、保守主義の形態は具体的に多様に存在する現状を維持しようというところから出発するため、一般的な形態を見いだすことは本質的に難しいと論じている。そして、R・カークのようにバークから現代までの保守主義を同質的に捉え、身分制社会など存在しない現代のアメリカにバークの議論を適応することはあまりに恣意的であると批判している。

(42) Noel O'Sullivan, *Conservatism*, J.M.Dent & Sons, 1976, pp.22-27.

(43) 佐々木、前掲書 一三二-一四頁

(44) Dunn and Woodard, op.cit., pp.102-109.

(45) Giddens, op.cit., ch.1.

(46) ヴィンセントは、保守主義の性質については五つほどの解釈におおよそ整理できるとして次をあげている。①貴族主義的イデオロギー 一七九〇〜一九一四、②プラグマティックなイデオロギー的立場、③状況的な見解、④習慣や考え方の性質、⑤イデオロギー的解釈(理性の万能や完成可能性に対しての反逆として保守主義)。さらにヴィンセントは保守主義の研究方法としては三つくらいの方法におおよそ整理できるとして以下をあげている。①国別に編年的に探求する方法、②編年的方法、③概念内容を軸とした研究 (Andrew Vincent, op.cit.)

- (47) 例えばケーキスは、保守主義とリベラリズムなどとの違いについて、保守主義の政治は純粹に多元的だが、リベラリズムや社会主義は、少数の事柄に重要な価値を認めると論じているが、価値多元主義に基づくりベラリズムが存在しうることは、ローティなどを想起すれば、直ぐに明らかとなる。(John Kekes, *A Case for Conservatism*, Cornell University Press, 1998, p.44)
- (48) 確かに、歴史の流れに貫通する、変化の否定とは別の視点を設定することは、状況によっては有効である。例えば、人間を完成可能な存在と理解するか、それともそれを否定するかという軸は、啓蒙的合理主義が結果としてもたらす惨禍に警戒するという主体的意図を背景とするならば、意義深い。しかし、人間理性に対する懷疑を保守主義のメルクマールとすることは、保守という言葉が一般に想像させるものとは一致するようには思えない。
- (49) Giddens, op.cit., p.8.
- (50) 篠原は国家形成過程の克服課題として一般に、同一化、正統性、参加、浸透、分配があると説明し、現代的な課題としてこれらに ecology を付け加えている。(篠原『ヨーロッパの政治』、東京大学出版会、一九八六年、一三一―一四頁) 先進諸国家においては、国家形成、浸透が十分に果たされたのちに、今日、グローバル化に直面しているが、その課題が十分に果たされていない途上国においてもグローバル化の進展は及んでいる。二つの課題に同時に直面したとき、どちらを優先させることが流れに適応的なのかは難しい問題である。
- (51) Walter C. Opello, Jr & Stephen J. Rosow, *The Nation-State and Global Order*, Lynne Rienner, 1999, p. 251.
- (52) Norberto Bobbio, *Left and Right*, University of Chicago Press, 1993.
- (53) Benjamin R. Barber, *Jihad vs. McWorld*, Ballantine Books, 1995.
- (54) 一つ、或いは二つのスペクトラムを設定して、その中に諸イデオロギーを配置するという試みは様々になされている。例えば、K・M・ドルベアは左右の横軸に運動や思想の担い手が属す社会階層、縦軸に変化の性格を配し、本稿に類似した図表を提示している。(Kenneth M. Dolbear, *American Ideologies Today, Shaping the New*

Politics of 1990s, McGraw-hill, 1993, p.206) 但し、ドルペアラの図表化は、アメリカの九〇年代のイデオロギーを整理することを狙いとしているのに対して、本稿はより長期、広範囲のイデオロギーの傾向を整理することを狙いとしており、幾つか点で違いがある。ドルペアラの整理では、縦軸は *progressive* と *traditional* と設定されている。その場合の伝統とはアメリカでの伝統を含意し、古典的自由主義はアメリカの伝統の一部を構成すると捉えられるため、リバタリアニズム、新自由主義は、保守的な領域に配置される。またドルペアラの整理では、横軸は、担い手がエリートであるのか大衆であるのかを基準とするため、多くの思想が右側のエリート側に置かれることになる。

(55) グローバル化への賛否を基準とした分類として、ヘルドとマックグルーは、'neoliberal' liberal Internationalists, institutional reformers, global transformers, protectionists, Radicals を挙げている。(David Held & Anthony McGrew, *Globalization/Antiglobalization*, Polity, 2002, ch.8) こゝには保守という観念は登場しない。国際政治については *liberal* と *realism* という分節がなされることを考えると、グローバル化を巡る議論の整理方法によっては、保守主義という名称、観念は二〇世紀末までの国内政治を分類する観念になる可能性もある。

(56) もう一つ軸を追加して三次元に構成するならば、政治判断の論理を付け加えたい。その場合には、一方に一元的合理性、他方に多元的な実践的理性が置かれることになる。伝統 *tradition* は保守性のメルクマールと一般に捉えられるが、ギデンスのような捉え方をするのであれば、伝統はむしろ個別性と結びつく。(A. Giddens, *Runaway World*, Profile Books, 2002) そしてそうした個別性は、多元的な実践的理性の領域に配置される。

(57) アメリカを念頭に置く場合、新自由主義は錯綜する。連邦国家の権限を抑制し、自由放任を主張することは、反ニューディールを鮮明にした西南部の保守主義とも一致する。但し、西南部の保守主義は、浸透・参加・配分に抵抗する性格を持ち、ここには含まない。またアメリカで新自由主義という場合は、新古典派経済学に代表される *neoliberalism* と、アメリカ民衆の改革をはかる *new liberalism* がある。もともと *new liberalism* は *neoconservative* と同時代に生まれた流れであるが、近年では R・ライシユに代表されるように、その中ではグローバル化に積極的に対応する動きが強まっている。

(58) 我が国では新保守主義、新自由主義は、しばしば互換性のある言葉として用いられてきた。(小谷崇『新保守主義経済学』青木書店、一九八七年、二二頁) またイギリスでもそうした傾向がある。ヘルドは、neoliberalismは時に neoconservatismと呼ばれるとしている。(David Held & Anthony Megrew, op.cit., p.98) 但し、アメリカの文脈では新保守主義は、A・クリストル、D・ベル、N・グレイザー、I・ハウなどにより六〇年代から担われてきた動向を意味し、新自由主義は、先の注57に述べた動向を意味し、新保守主義と新自由主義は明確に区別される存在である。初期の新保守主義については次を参照。Joseph Dorman, *Arguing the World*, The University of Chicago Press, 2001.

(59) 改良的保守主義という表現はエプシュタインによる。(Epstein, op.cite.) 産業化が遅れ、上からの改革を目指す思想や運動の多くはこれに該当する。一九世紀の保守主義、自由主義、社会主義はB図において一直線上に並び、縦軸からみても、横軸からみても、その配列に変化はない。そのためにライト・レフトという一つの軸に配列されてきた。しかし改良的保守主義などは一つの軸だけでは捉えられないことがわかる。古典的自由主義の一部とこの改良的自由主義をあわせものが、オサリバンに従えば懐疑的保守主義となる。

(ます のぶお・本学法学部助教授)